

若者の方言に対する態度

教育文化学部 日研生
スカレブ・アレクサンダー
学籍番号：1813179

若者の方言に対する態度

—はじめに—

現在の日本で標準語は社交や公式な交渉の場合、主なコミュニケーション手段として使われている。しかし、どんなに普及しても標準語は方言がなくなる原因にはならなかった。なぜならば、方言の保存に支援するのは日本の伝統的な文化や日本社会の特色で、ほとんどの田舎、または方言の地域におけるイベントや祭り、それからローカルテレビ番組など方言で放送されているからである。ロシアの場合は標準語というのは普通に作家たちが使っている言語、または公式な書類で使われている書き方と考えられているが、日本の文化の場合は作家だけでなく、普通の人の話し方にも反映していて方言は地域の所属を示す。

昔から、方言と地域性との間には深い関連性がある。しかし、時が流れ、マスメディアの技術が発達していくことによって、歴史的に出来上がった表現の多様性が標準語の影響で縮んでいく。過去に方言でバラバラに話す人口を団結させるというコースは日本政府によって進められていて、その結果「方言は間違った言語」という人がいた、また自分が方言で話せることを隠そうとしていた人もいた。

『<http://shounen.ru/nihon/lang-soc.shtml#p2> V.M. Alpatov ; Japan: Language and society』

私は秋田に来る前に、秋田大学では現地の人、また近所から秋田大学に進学した人が全員地域の表現で話しているだろうから、その話し方が私に聞きづらい、あるいは全く理解できないだろうと考えていた。ところが、私が驚いたことは、秋田を出身地とする若者さえも標準語ばかりで、秋田弁をめったに使わない。方言を耳にするたった一つの機会は先代者に話すことなのだ。でも方言で話さない若者たちはおじいさんとおばあさんたちの世代と距離感を感じているのではないだろうか。

他県の学生を例に挙げると方言の言葉を使っている人を見たことがあるけど、そんなに多くなかった。その人に方言使用について聞いてみたら「青森の方に行けば方言を使っている人が増える」「田舎で育った人の方が方言でしゃべる」などという答えがあった。

大学生活の中、日本人の学生に囲まれた私には、若者が方言のことをどう思っているのだろうか、ということが不思議に見えた。それで、近代学生の方言についての意識を対象に、方言に対してどういった価値観を持っているか、どのくらい使っているか、どのくらい身の回りで耳にするかを調べたくなった。そこで、東北に住む若者たちは、方言使用者の減少によって方言自体はどうなっていくのか、地元の方言や秋田弁についてどのような意識を持ち、どのように理解しているだろうかということの研究することを目的とする。

アンケートの分析と考察

みんなに配ったアンケートの結果が出たら答えがたくさんあった。私が一番びっくりしたことは若者の方言に対して持っている考えや感じていることがほぼ同じだった。しかし、女性の学生たちはもっとはっきりした答えを見せた。そもそも男性の学生たちは方言が無くなっていくことに対して別に心配していなかったが、「私たちは方言を守らなければならない」という答えがあったのだ。一番よく目に当たる言い分は「方言は地域性を持って地域の文化や歴史とつながっていて、世代の間でリンクの役割を果たしている。また方言は日本語を方言がないより豊かにする」だった。

多くの人に知られている事実かもしれないが、日本の地域はそれぞれその地域特有なお祭りやイベントがある。私が驚いたことはそのイベントの名前の中に方言の言葉と表現がよく入っていることだ。アンケート調査のデータを整理していた時、私は面白いと思った答えがあった。その面白い答えの人は「地域の文化とお祭りが存在する限り方言はなくなるはずだ」と主張したのだが、私はこれに完全に賛成するとは言えない。なぜかと言えば、みんなが話している言語があつて、それから方言の言葉はこの言語の中からなくなるとすれば、時間が流れその言葉は使われなくなるからである。方言は死語になってしまうのだ。世界歴史上の言語の死語への変化の具体例はラテン語だ。ラテン語は現在死語と認められているが、それでも医学や生物学などの現場で使われることが多い。また多くのヨーロッパ系の言語はラテン語を基盤とする。私が言いたいことはヨーロッパ系の言語の文法や言葉がラテン語に似ているのに、平均ヨーロッパ人にラテン語で話すように頼んでみると、おそらく医学部と生物学部で勉強したぐらいの人にしかラテン語で話してもらうのだ。方言もラテン語のように死語になる危険がある。人が方言を守るために行動しないと地域の言葉は、どんどん日常生活で使われなくなって将来の世代にとって近代言語に少し似ているエコーのように聞こえるのだらうと私は考える。

私が秋田大学の学生に配ったアンケートは20質問からなっていて、毎日の方言使用の量、方言の将来に対する考え、学生の方言の理解能力についての質問、普通に方言を使う状況についての質問などというトピックを触れる。

これから私はアンケート調査で集めたデータをまとめて、現代の学生は方言と方言の将来をどう思っているのかについて結論を出してみたい。

統計を作るために初めの4つの質問は性別、年齢などという個人的な情報だった。

1. 年齢

このアンケート調査の参加者は約50%は19歳で、15%は20歳、10%は18歳、25%は年齢行で何も書かなかった。

2. 性別

約70%の参加者は女性で30%は男性だった。しかし、性別行になんも書かなかった人は2-3人がいた。

3. 学年

60%は1年生で、40%は2年生だった。

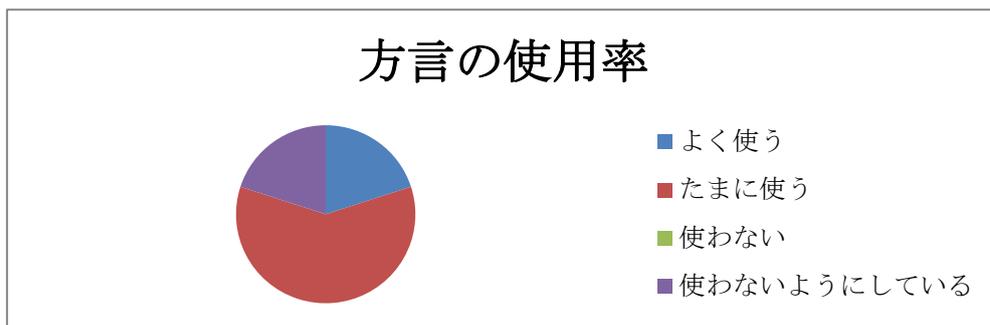
4. 出身地

約90%の参加者は秋田市と秋田県だったが、東京の人と一人の沖縄の女の子がいた。

下記は方言自体についての質問が集まっている。

5. 会話の時に方言をどのくらい使いますか

約60%の参加者は「たまに使います」と答えたが、20%は「よく使います」また20%「使わないようにしています」と答えた。方言を使わないと答えた人がいなかった。



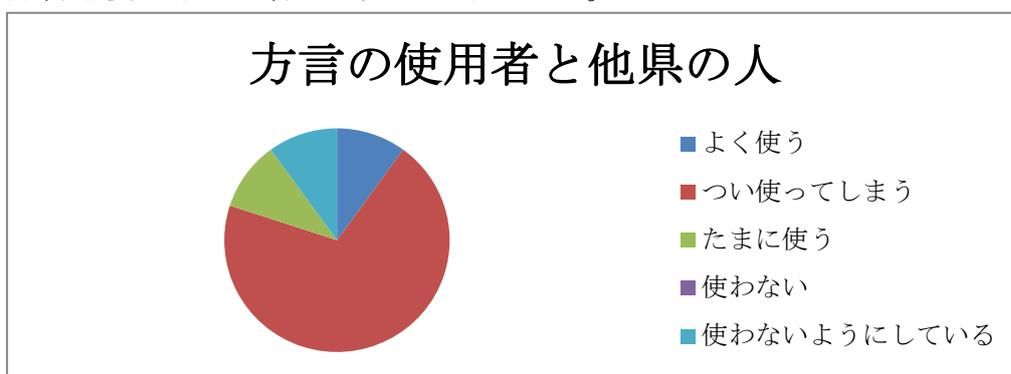
アンケートの質問の下にあるところに選択の理由が書かれていた。普通に学生たちは理由として具体的なグループの中で使っていると書いていた。ほとんどの場合、そのグループは友達と家族だった。このグループより「地元の人」という答えもあった。その他に方言を使う状況についての答えもあった。普通にそれらは「挨拶と語尾」だったが、方言を使わないようにしている人は「田舎っぽいので普通に使わないようにしているが、テンションが高いとき、急いでいるときに使ってしまう」と答えていた。

6. 身の回りで方言をどのくらい耳にしますか

アンケート調査の参加者は50%「よく耳にします」と答えて、あと50%の人は「たまに耳にします」と答えた。方言をめった耳にしないと答えた人がいなかった。したがって今のところ秋田市で方言を会話の時に使う人が多いが、50%の参加者は「たまに耳にします」を選択したから見れば、方言を使わない人がいて、方言使用者が減っていく傾向がみられる。

7. 他県の人との会話で方言を使いますか

参加者の10%は「よく使います」と答えて、70%は「つい使ってしまう」、10%は「たまにつかいます」、10%は「使わないようにしています」と答えた。方言を使わないと答えた人がいなかった。



図に書かれているように、ほとんどの人は他県の人との会話の時に方言を無意識のうちに使ってしまう。方言を使わないと答えた人がいなかったことからすれば、「使わないようにしています」と答えた人は会話の時に方言使用を最小化しようとするのに、方言が出てしまう場合がある。

そう言った人は普通に理由として、相槌を打ったりするときに「んだ」が出てしまい、「急いでいるときやテンションが高いときに使ってしまう」と書いていた人がいた。他県の人と話すときに使わないようにしている主な理由として、「他県の方言理解できないし、自分の方言も理解してもらわないだろうから」だった。

面白いことは「普通に方言だと意識しないうちに使ってしまう」という答えだった。また、もう1つの面白い意見は「他県の人に地元を紹介するときに方言を使う」だった。1つ目ののは方言の言葉は潜在意識の奥のレベルに置いていて、他県の相手が分からないだろうけど、自分が知っている言葉だから相手も理解するはずとその人が考えるわけだ。2つ目の答えの場合、人は地元のことに対して誇りをもって方言で地元を紹介するのだ。

8. 方言で話す人との会話の時に方言を使いますか

40%の参加者は「よくつかいます」と答えて、60%は「つい使ってしまう」と答えた。ほかに答えた人がいなかった。

一番多い答えは「相手に方言で話してもらって自分も連れて方言を使ってしまう」

だった。また、「標準語より方言で伝えやすい気持ちやニュアンスが多い」、「相手と親密さを感じている」という答えがあつて、「家族と日常生活で、おじいさんたち世代の人と話すときに使う」という人もたくさんいた。

ほとんどの人は自分の答えで人の具体的なグループを強調していた。普通にそのグループは家族と友達だった。これは地域性以外に方言が団体性があるということを示す。現代の若者は方言を親しい人と話すときに使いがちなのだ。

9. 方言をあまり使わない（であろう）私たちが、年配の方と話した時に、意味が分からないことがありますか？

75%の人は「たまにあります」と答えて、25%は「めったにありません」と答えた。

面白いことは「よくあります」と「ありません」と答えた人は1人もいなかった。しかし、方言の言葉の意味が分からないことがある人は、意味が分からないことがあまりない人より多かったから、年配者たちが使っている表現や言葉がどんどん忘れていくという結論が出せる。あるいは過去に使われていた方言は現在の若者が理解できないことがある形まで簡素化してきたことがみられる。この簡素化は将来に方言が死語になる原因になれるし、簡素化はさらに続ける場合に方言が標準語に溶け込んでいくつか新しい単語を標準語に加えて一体になることも可能。

下記の質問にはいろいろな感じることを説明するように頼んでいたのに、選択の答えがなかった。

10. もし、分からないことがあつたとき、寂しさやおじいさん世代との距離を感じることがありますか？自分の感じることを書いてください。

全員は寂しさを感じないと書いた。ほとんどの人は「面白い」と「不思議な感じを感じている」などという答えだったが、「寂しさより世代と年齢の差を感じる」や「その面白い言い方に興味がある」と書いていた。また年寄り人の言うことが分からないことがあるので残念だという人と、方言で分からないことを聞いたらその表現を理解できるようになりたい、あるいは方言を勉強したいという人も割と多かった。

11. 方言に対するイメージを教えてください。

この質問で似ている答えがたくさんあつたが、方言の団体性に指すいくつかの面白いコメントがあつた。

多くの方は「田舎っぽいけど、地域に所属する感じがある」、「ここに住んでいるから知るべきものだ」、「地域を代表するものだ」といった人が多かったが、私が珍しいけど面白いと思った答えは「内輪だけで通じる暗号のようなもの」だった。この答はなによりも方言の団体性を表すのだ。多くの方は方言を自分が親しいと思う小さいグループの中で使うからすれば、

現在の方言は地域のスケールからより小さなグループに移動してきたことを示す。

1 2. 方言は今後どうなっていくと思いますか？

1 3. 方言は無くなっていくと思いますか？

この2つの質問がつながっているから、その答えを統一する。

この質問に答えた人はほとんど方言が無くなっていくことについて心配しているようだ。多くの人は方言を使っている人がいる限り方言が残ると主張していたが、若者の年配者の世代との交流が少なくなったため、おじいさんとおばあさんたちがいなくなった後、方言を使う人が減っていくという心配が多かった。また小さい地域の方言は隣の地域から影響を受けて、その小さい方言が無くなるといった人が多かった。

方言が無くなるかと主張していた人の中に一番人気のある言い分は、「残念ながら現在の若者の言語が乏しくなっていくので、おじいさんたちの世代が無くなったなら方言もなくなっていく」だった。もし方言が無くならないとしたら、使う人は将来に必ず減るというイメージがはっきりみられている。

1 4. テレビで自分の地元とは違う地元テレビ番組を見たときに、どのくらい理解することができますか？

ほとんどの人は「だいたい分かります」と「ほとんど分かります」と答えた。またこれ以上、「長い話だったら、分からないところがけっこうあります」というコメントも割と多かった。こういうコメントは現在の若者が方言を耳にする時に分からない表現があることを示す。したがって会話の中で聞き取れない、あるいは理解できないところがあるとしたら、当然その表現や言葉は話すときに使われない。方言の「語彙」が縮んでいくのだ。

もし将来に方言を使う人の数が減るとすれば、テレビで放送される方言の番組を理解できない人が増える。またテレビの番組は普通に標準語で放送されていて方言使用が少ないから、若者はテレビを見て方言より番組で使われる表現を身に付けるだろう。これも方言が無くなる原因の1つになれるのではないかと私は考えた。

1 5. 日常会話で、標準語だけで意味が伝わらないところがあると思いますか？あるとしたらどんなところですか？

質問に答えた人の中に一番多かった意見は「意味は標準語だけで十分に伝わりますが、方言を使うことで説明できないニュアンスが加わります」だった。そういったニュアンスは普通に気持ちの伝え方とつながっているようだ。例えば、北海道弁では「いづい」という言葉がある。標準語で言うと「不便」、「違和感がある」という意味なのだが、方言の言い方では「違和感」という言葉にどのような違和感なのかというニュアンスを加えるようだ。『<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/787553.html>』

ある学生の言葉によると、方言の中に標準語で伝わりにくいニュアンスがたくさんある理由は方言が地域性を持っているからである。いろいろな地域に住んでいる人の考え方が違うことによって、ある現象に対するイメージとこの現象を説明する言葉も違う。それで、様々な考え方やいろいろなニュアンスを集めて方言は日本語を多様化して、もっと豊かな感じにする。

まとめていえば、将来に方言が統一的なものになって無くなるとすれば、考え方の多様性は失われてしまう危険がある。

16. 友達があまり方言を使わないことに気づくことがありますか？

この質問の答えについて一番驚いたことは、学生たちがそんなことにあまり注意を払わないことだった。しかし、その問題に対して心配している人が数人いた。一番多かった答えは「わからない」、「私自身にとって大したものじゃないので、あまり気づかない」だった。一方、友達が方言を使わないことに心配している人は「よく気づきます」、「そんなことについてよく考えています」と言っていた。

ほとんどの人が方言が使われなくなることに気づかないことから見れば、方言の消失は潜在的な性格を持っている。若者たちはただ方言がどんどん使われなくなることを意識しないのだ。

17. 方言を武器として使うことがありますか？

この質問で「武器」という言葉はどういう意味で使われているかをアンケート調査の参加者に任せることを目的とした。予想以上に答えはいろいろあった。「喧嘩のときに相手が私の言うことが分からないように、わざわざ方言で話すようにしている」から「関西弁と広島弁がかわいいと考えられているから男性と話すときに使う」まで答えと「武器」という言葉の理解がたくさんあった。

女性の参加者の中に一番多い答えは「もっとかわいく話すように自分の地域ではなく、関西弁を使っている」、「男性にかわいいと思われるように、会話の時に方言で話す」だった。この使い方はある程度武器に似ているのではないだろうか。残念なことは武器として使われる方言が自分の地域の言葉ではないことだ。現在、関西弁はテレビ番組や漫画で使われることが多くて、また関西弁で話すキャラクターは普段かわいいから、「関西弁がかわいい」という考え方が今の若者に押し付けられている。それでかわいく見えるようになりたい女性は男性と話すときに関西弁を使ってしまう。もしかして関西弁と他のかわいいと考えられる方言をさらに普及させていくと、ある日に小さい地域の方言は忘れられてしまうかもしれない。

18. 方言を守る必要があると思いますか？ どうしてそう思いますか？

アンケート調査の参加者はみんな方言を守る必要があるという立場をとったが、数人は「方言は守ろうとしなくても残る」と言っていた。答えの中によく出てくる方言を守る必要性に対する言い分は「方言は前の世代から受け継いだ文化や歴史だから」、「食べ物やいろいろなお祭りの名前と地名に方言の言葉が入っているから」、「方言のおかげでアイデンティティを感じるから」などということだった。

確かに方言は歴史的に出来上がったものとして、過去の文化や伝統をある程度描くことができる。方言の歴史に対して興味のある人と伝統的な文化が好きな人はその歴史が続くように文化、昔からある話し方を守らなければならない。しかも、方言で話す人は自分の地域を代表して、方言のコミュニティーに所属している。

19. 時間が流れ、いろいろな言い方、言葉、表現は人気が出たり使われなくなったりしますが、方言を使うことは将来に人気が出ると思いますか？

この質問に答えた人は「人気が出ないけど、使われ続ける」と「そう思いません」とよく言っていた。なぜなら、そこで言い分として「インターネットであまり使われないから」と「昔からみんなに自然に使われているから」というコメントが使われていた。

確かにネットの影響であるものは人気が出ることもある。しかし、方言の場合は全く反対の結果になる危険がある。インターネットはそもそも多くの人がコミュニケーションを取り合うところで、違う地域の人の中で規範化した言語で話したほうが分かりやすいのではないか。一方大幅に普及している関西弁はネット上で使われることがさらに多くなる。

20. 方言のあり方について、あなたはどのような考えを持っていますか？

この質問で若者たちは方言に対してどういった考えを持っているのかを示すので一番大事な質問の1つである。多くの人は「方言は地域への親密性や特徴を表す」、「古くからあるものだから、大切にしなければならない」と「方言に対して誇りを持つといい」と主張していた。

文化や伝統を守る中で方言を守らなければならないという点から見れば、方言が無くなってしまうと文化の一部も消えてしまう。しかも、歴史的な情報の源流という役割を果たしている以上、方言は言語を多様化して様々な気持ちのニュアンスをくわえる。

結論

結論では若者の方言に対する態度について考えてみよう。普通に若者たちは方言を無意識のうちに使っている。しかし、前の世代の人に比べたら現在の若者が話す方言はますます標準語で薄まっていく。確かに東京から遠い地域でも話している学生の言うことに耳を傾けてみると、この地域の人特有な方言より規範的な日本語を聞こえるだろう。それは現在の人の中に方言話者が減っていくことを示す。

アンケート調査で、どのような場面で若者が方言を使っているか、どのくらい方言で話すかということが分かった。おじいさんたちの世代の人に比べて現在の方言は団体的な性格を持つ。言い換えれば、周りの人によって方言を使うか、標準語で話すか、この2つの中から若者たちは選ぶ。面白いことはアンケート調査が見せたように、家族と友達以外の場面で学生たちは方言を使うことが人によって違うが、ほとんどの場合に少ない。方言は他の言い方が知らないのを使うものから内輪だけのための言い方になってきたのだ。でも時が流れこのようなポジションも変わる危険がある。2-3世代が変わって方言は日常会話の中から消えてしまう。

日本社会はそもそも伝統を守るという考え方が強くて、若者たちもこの雰囲気です育ったから例外ではない。国の文化に対して誇りを持ったり、歴史に対して興味があったりする現在学生の世代の人は文化を守る活動の中で方言を守って大切にしなければならないという。しかし、発展したマスメディアやインターネットの影響で、標準語やかわいいと考えられる関西弁は広がって、小さい地域の方言をどんどん押し出していく。小さい子供は毎日標準語のテレビ番組を見れば、規範的な言葉を身に付けるのだろう。

日本社会の話に戻って、現在の若者は方言があることに対して誇りを持っていて、日本文化の1部分として守られるべきだという意見が多いが、なぜか会話の中で方言を使うことが逆に少なくなっていく。

最後に私の意見では現在の若者たちは方言が死語になる危険があることを意識して、方言が残るために、おじいさんとおばあさんたちと交流したりして努力した方がいい。